

心豊かな生徒の育成を目指して

－ 人と人とのかわり合いを育てる特別活動と評価 －

知多市立八幡中学校

1 はじめに

本校では、平成14年度から、不登校や休みがちな生徒を少しでも減らし、「自らを律し、他を思いやり協調できる心豊かな生徒」の育成を目指した研究を行ってきた。平成15年度からは、学級活動の時間に行う構成的グループエンカウターのエクササイズによって培われる温かい人間関係や資質が、学校・学年行事に生かされ、心豊かな生徒の育成につながると考えて研究実践した。

2 平成15年度・16年度の研究

(1) 研究の仮説

自分を見つめ、他人を認めることができる人と人とのかわり合いを高める教育活動を取り入れることにより、学校行事に意欲的に取り組むことができる望ましい学級集団が育つであろう。

(2) 仮説検証のための手だて

仮説を検証する手だてとして、ア 学級満足度調査（市販Q-Uテスト）、イ 構成的グループ・エンカウター、ウ 学校行事後の生徒自己評価を活用した。

ア 学級満足度調査・・・生徒の実態を把握するために活用した。

【表1】

居心地のよいクラスにするためのアンケート（それぞれの質問に、以下の5段階で答える）			
5・・・たいへん あてはまる	4・・・まあまあ あてはまる	3・・・どちらでもない	2・・・あまり あてはまらない
1・・・全く あてはまらない			
1. 勉強運動等で友人から認められている	2. クラスの中で存在感があると思う	3. 自分を頼りにしてくれる友人がいる	4. 注目されるような経験をした
5. 自分の考えがクラスの意見になる	6. クラスの活動に積極的に取り組んでいる	7. 私を認めてくれる先生がいる	8. グループ内で中心的なメンバーだ
9. 協力してくれる友人がいる	10. 本音や悩みを話せる友人がいる	11. 無視されることがある	12. からかわれるたりばかにされる
13. 冷やかされることがある	14. ひどい悪ふざけをされることがある	15. 班に入れずに残ってしまふ	16. 浮いていることがある
17. 一人でいることが多い	18. 周りの目が気になり不安などを覚える	19. 学校に行きたくないときがある	20. クラスの友人関係について知らない

イ 構成的グループ・エンカウター・・・実施により、生徒に次のような効果が期待できると考え活用した。

期待できる効果

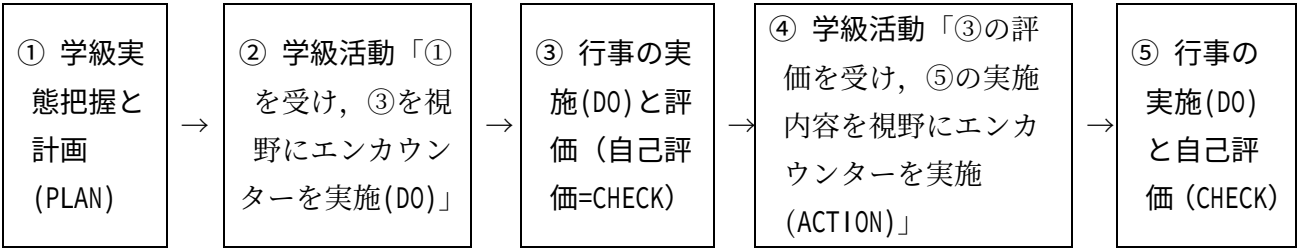
自己理解の深まり、自己肯定感の高まり
多面的な見方でとらえる他者理解
集団全体で得られた気持ちや達成感の共有化
自己表現・自己主張・傾聴・感情表現のスキル・トレーニング

ウ 学校行事後の自己生徒評価・・・次の育てたい力や行事の目標に照らし合わせて項目立てをし、「とてもあてはまる」をA、「まあまああてはまる」をB、「あまりあてはまらない」をC、「全くあてはまらない」をDで答えさせた。

- | | |
|--------------------|---------------------------|
| ①自己や他者を生かそうとする意欲 | ②学校生活をより楽しくしようとする考えや判断力 |
| ③集団生活を向上させようとする行動力 | ④活動のねらい・役割・自己や集団を高める方法の理解 |

(3) 研究の計画

学級活動の時間に行うエンカウンターと学校・学年行事を関連付け、大きな行事と行事の間にエンカウンターが行えるよう、計画を立てた。



(4) 研究の実践

ア 平成 15 年度の 1 年生の実践

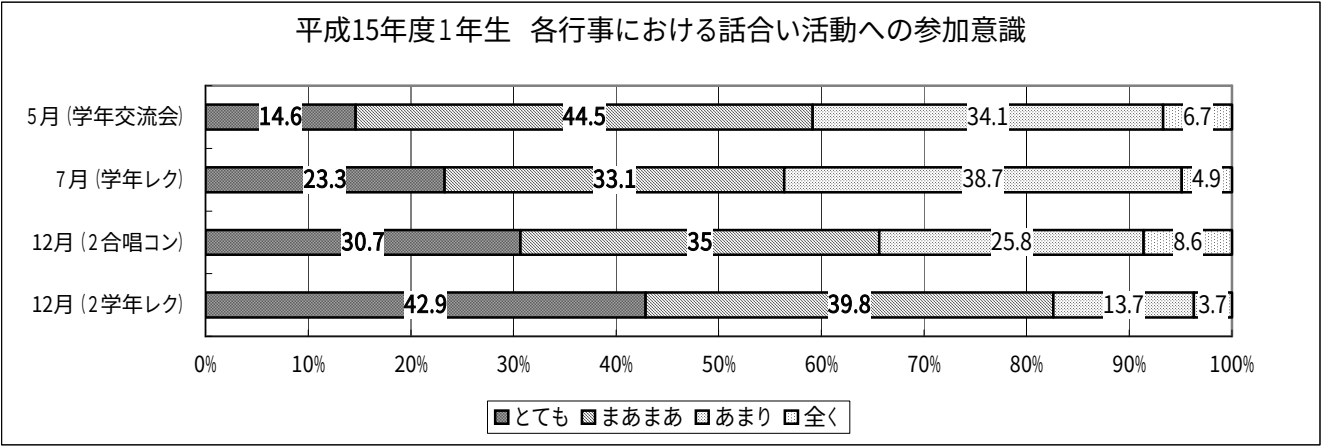
平成 15 年度の 1 年生は、学年交流会での自己評価や学級満足度調査から、協力していこうという意識は高いという結果が出ていた。しかし実際には、あまり協力し合っているようには感じられなかった。他のデータから推察すると、話し合い活動を苦手としていることが原因ではないかと思われた。そこで、話し合う場面を意図的に計画することにより、意識だけでなく実質的に協力できるようになるのではないかと考え、以下のような実践を行った。

【学級活動におけるエンカウンターと学校・学年行事の計画】(◇=エンカウターのエクササイズ)

	5 月・6 月	7 月	9 月・10 月	11 月・12 月	1 月	2 月・3 月
	○学級満足度調査			○学級満足度調査		○学級満足度調査
学級活動	◇ 協力 「先生ばかりが住んでいるマンション」	◇ 協力 「私たちのお店」	◇ 協力 「図形を作ろう」	◇ 意思伝達 「僕らはジョーズ」 ◇ 集団の意思決定 「火事だよ」	◇ 集団の意思決定 「僕らのリーダー」	◇ 他者理解と自己理解 「いいところ四面鏡」
学校行事			学校祭	合唱コンクール		3 年生を送る会
学年行事	学年交流会	学年レク		学年レク	百人一首大会	

実践の成果として、話し合い活動への参加意識ではグラフ 1 のような変容がみられた。しかし、生徒の様子を見てみると、まだまだ自分の意見を積極的に伝えることができないという課題が残った。学級満足度調査では、5 月と 2 月とを比較すると、学級満足群は 48.0%から 50.6%へ、学級不満足群は 12.4%から 11.5%へ、要支援群は 5.1%から 4.6%と、少しずつよい方向へ変化がみられた。

【グラフ 1】



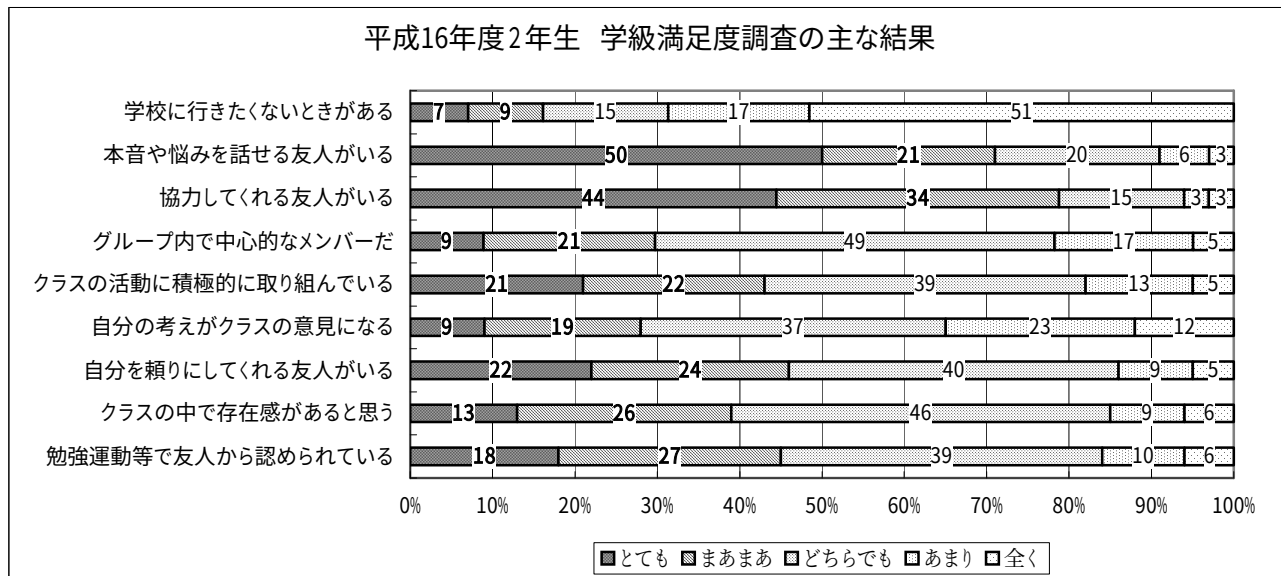
イ 平成 16 年度の 2 年生の実践

平成 16 年度は、前年度の実践を踏まえ、各行事で付けたい力を明確化し、それに関連させ学級で構成的グループ・エンカウンターを行った。

(7) 実態把握

平成 16 年度 2 年生においても、学級満足度調査（グラフ 2 参照）により、学年の実態把握を行った。2 年生の傾向としては、1 年生時よりも、友人関係の結び付きが深くなっていた。自分が友人から認められていると感じている生徒も少しずつ多くなってきた。これらの感受性を伸ばしつつ他人を受け入れる心の育成や、グループ活動や学級・学年行事でのリーダーシップの育成を目指した。

【グラフ 2】



(1) 特別活動の年間計画（PLAN）

上記(7)の実態を踏まえて、以下の年間指導計画を立てた。

【学級活動におけるエンカウターのねらいと学校・学年行事の計画】

	5月・6月	7月	9月・10月	11月・12月	1月	2月・3月
学級活動	○学級満足度調査 ◇コミュニケーション	◇自己理解と 他者理解	◇価値観・話し 合い	○学級満足度調査 ◇役割意識	◇自己表現	○学級満足度調査 ◇自己実現
学校行事			学校祭	合唱コンクール		3年生を送る会
学年行事		林間学校				

(ウ) 林間学校に向けての構成的グループ・エンカウンター（D0）

「コミュニケーションを育成する」エンカウンター（「バースデイチェーン」 5月実施）

全員で大きな輪になって並ぶ → 1月1日から誕生日順に並び直す → 教師の隣から誕生日を聞き、間違いがあったら正しい場所に誘導する

<実施後の生徒感想>

〇〇君と誕生日がいっしょだった。楽しかった。

「コミュニケーションを育成する」エンカウンター（「探偵ごっこ」 5月実施）

1から30までの項目（植物を育てている・ジェットコースターがこわい・トマトジュースが好きなど）に当てはまる人をどんどん探していく。

ペアになってじゃんけん → 勝った人が負けた人に質問 → はいが1回出るまで質問をし、その後負けた人が1回だけ質問する → ペアを解散し、次を探す。

<実施後の生徒感想>

もっと積極的に聞けばよかった、話すって難しい。おもしろかった。いろいろな人と話せてよかった。もう少し時間が欲しかった。またやりたい。今までしゃべったことのない人や仲良くない子と話すことができた。気軽に話せたので、何となくクラスの人と親しみやすくなった。

「他者理解を育む」エンカウンター（「私の好きなものリレー」 7月実施）

ペアをつくる → 質問が書かれた用紙を配る → 質問の中から好きなものを選んで交代で相手に質問し合う → 終わったら、自分の回答をプリントに書く → 結果を集計してみんなに知らせる

＜実施後の生徒感想＞

いろいろな人の好きなものが分かってよかった。他の人のことを覚えるのがたいへんだった。〇〇君（特殊学級）と交流できた。みんなのことについて詳しく知ることができた。私もそうだけど、みんな恥ずかしそうだった。楽しかった。

（エ）林間学校への取組（D0）

＜スローガン＞「しっか林間、がんば林間、みんなで思い出つく林間」（7月実施）

＜育てたい力＝目標＞

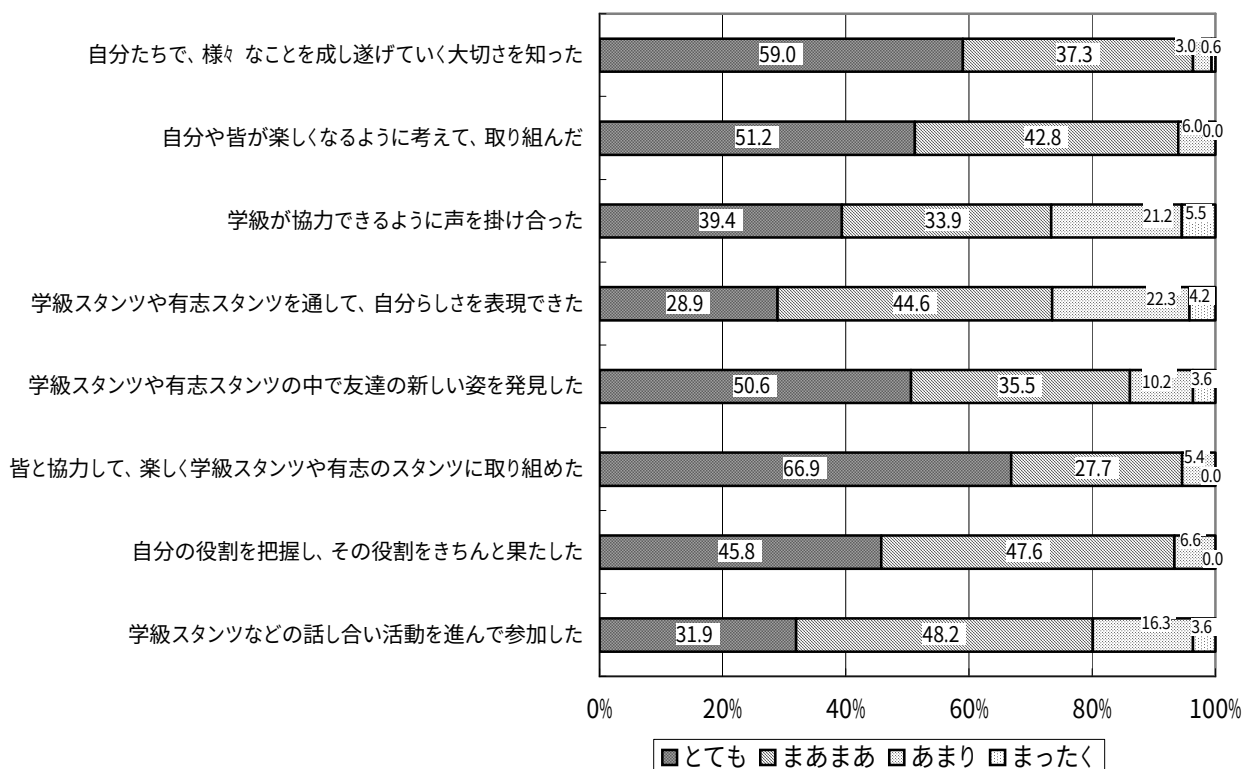
- 自分の役割を考えながら、皆と協力して活動に取り組むことができる。
- 活動を通して、友達のよいところを見付けることができる。
- 学級スタンツや有志のスタンツにおいて自分自身を表現できる。

（オ）林間学校後の生徒自己評価（CHECK）

林間学校は2年生が4月から実行委員会を立ち上げ、こつこつ取り組んできた行事であった。長い時間をかけている分だけ、どの項目も生徒自己評価は高い値を示していた（グラフ3参照）。特に「友達の新しい姿を発見した」では「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」の生徒が86.1%と高い値を示し、他者を理解しようとする構成的グループ・エンカウターの効果が現れていた。また、「皆と協力して楽しく学級スタンツや有志のスタンツに取り組めた」という生徒は「とても・まあまあ」が94.6%と高い。これに対し「学級のスタンツや有志のスタンツを通して、自分らしさを表現できた」という生徒は「とても・まあまあ」が73.5%と下がっていた。これは、「失敗した」や「練習不足だった」「演技の時間が少なかった」などが生徒の感想にあった。よりよいものにしていこうという前向きな姿がこの値を下げていたと考えられた。

【グラフ3】

平成16年度2年生 林間学校後の生徒自己評価の主な結果



(カ) 学校祭に向けての構成的グループ・エンカウターの方向付け (ACTION)

前ページの自己評価(オ)によれば、構成的グループ・エンカウターのねらいである、他人を受け入れることは十分できるようになっていたと判断し、自分の意見や他人の意見も聞きながら、グループの全員が納得する話し合いをねらったグループ・エンカウターを実施することとした。

(キ) 学校祭に向けた構成的グループ・エンカウター (D0)

「何に価値をおくかを考え、主張しつつも他者を尊重し、話し合いで合意することを学ぶ」エンカウター

(「私たちの学校祭HOWマッチ？」 9月実施)

体育祭の価値で大切だと思うものに値段を決める。 → グループとしての値段を付ける。 → グループで話し合い、ちょうど100万円になるように何をかうか決める。

<実施後の生徒感想>

人によって考え方が違う。お金で買えないものがある、そんな物を大切にしたい。お金で表すのは難しい。ほとんどの班が「思い出」と「友情」を入れていた。学校祭に生かしたい。みんなが協力すれば、「リーダー」はいらない。

(ク) 学校祭への取組 (D0)

<スローガン>「俺がやらなきゃ誰がやる～史上最高の八中祭」(10月実施)

<育てたい力=目標>

- 学校祭の活動全般において意欲的に取り組むことができる。
- 学年で作品の制作や運動競技の中で、他人と協力することができる。
- 学校祭の準備の中で、活発に話し合い、自分や他人を認めることができる。

(ケ) 学校祭後の生徒自己評価 (CHECK)

表2によれば、林間学校の生徒自己評価同様、おおよそどの項目も高い値を示していた。ただ、「あまり・全くできなかった」という生徒が多い項目は、「学級や委員会などの話し合い活動に進んで参加した」の23.1%、「同ブロック同士協力できるよう後輩先輩に声を掛け合った」の29.5%、「学級がまとまるように積極的に声を掛けながら行動できた」の41.1%であった。活発な話し合い活動や集団への働き掛けをねらいとして実施したエンカウターの効果が十分現れなかった。この理由として、学校祭に至る行事の過密さが考えられた。学校祭の準備と平行して、運動部活動の2年生主体の大会があったり、学校祭直前の9月の最終週に中間テストがあったりして、生徒は自分のことで精いっぱいになり、他者への配慮ができにくくなったのではないかと考えられた。エンカウターと行事の内容だけで成果が上がるのではなく、行事の準備や取組の過程も生徒の成長に大きくかかわりがあると考えられ、日程や指導の在り方を今後の課題とした。

【表2】

平成16年度2年生学校祭後の生徒自己評価の主な結果	とても	まあまあ	あまり	まったく
学級や委員会などの話し合い活動に進んで参加した	30.1	46.8	20.2	2.9
自分の役割を把握し、その役割をきちんと果たした	56.6	37.0	5.2	1.2
制作を通して皆と協力できた	60.7	31.2	5.8	2.3
自分の出場種目に一生懸命取り組むことができた	80.3	17.3	1.7	0.6
同ブロック同士協力できるよう後輩先輩に声を掛け合った	37.0	33.5	24.3	5.2
学級がまとまるように、積極的に声を掛けながら行動できた	28.3	30.6	32.4	8.7
自分や皆が楽しくなるように考えて、取り組んだ	40.7	48.3	9.9	1.2
自分たちで、様々なことを成し遂げていく大切さを知った	54.1	36.6	7.0	2.3
自分たちでお互いを高め合う大切さを知った	54.4	34.5	8.8	2.3
友達同士の友情が深まった	55.8	30.8	9.9	3.5
スローガン「俺がやらなきゃ誰がやる～史上最高の八中祭」が達成できた	39.5	41.3	15.1	4.1

(コ) 合唱コンクールに向けての構成的グループ・エンカウターの方向付け (ACTION)

話し合い活動を中心としながらも、グループや学級の中での存在を意識させながら、自分自身を積極的に表現させる構成的グループ・エンカウターを計画し、実施していった。

ウ 生徒の変容からの考察

(7) 平成 15 年度入学生校の学校祭後の生徒自己評価の比較

平成 15 年度の入学生が、1 年生として学校祭を経験した後の生徒自己評価と 2 年生として学校祭を経験した後の生徒自己評価とを比較してみた。項目「協力して製作」では「とても・まあまあ」に当てはまる生徒が 73.2%から 91.9%に、「集団がまとまるように行動」では、48.4%から 66.5%に上昇していた。2 年生では、1 年生時と比べ、全般的に生徒自己評価が高くなっていた。ただ、項目「自己表現」という点においては 68.7%から 62.5%に低くなっていた。積極的な自己表現の態度の育成が今後の課題である。

(1) 抽出生徒による学級満足度の変化

学級満足度調査では、居心地のよいクラスにするためのアンケート項目 1 から 10 までの合計が承認得点、項目 11～20 までの合計が被侵害得点である。承認得点が 25 点以下で、被侵害得点が 28 点以上あると学級不満足群の中でも「要支援群」とされる。昨年度 5 月実施の学級満足度調査では「要支援群」は 5.1%であったが、昨年度 2 月には 4.6%とわずかながら減少した。この「要支援群」の生徒の中で、同じ学級にいた 3 人の生徒 A、B、C に着目してみた。

3 人の生徒の学校生活の様子

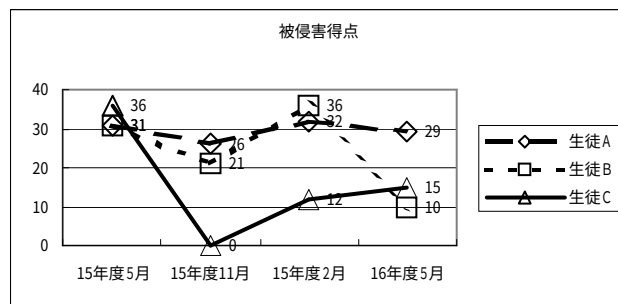
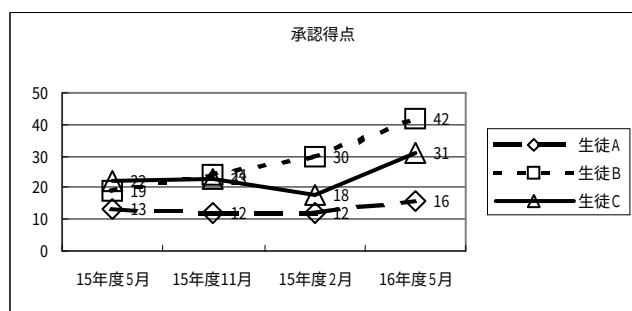
生徒 A…人間関係が苦手、からかわれやすい、アスペルガー症候群の傾向

生徒 B…落ち着きがない、調子に乗りやすい、けんかが多い、LD の傾向（小学校から報告有）

生徒 C…集中力に欠ける、調子に乗りやすい、他人をからかう

【グラフ 4】

【グラフ 5】



グラフ 4 から、生徒 B と生徒 C は、次第に学級内で認められていると感じるようになっていった。また、グラフ 5 によれば、生徒 B、C は学級内でのトラブルを抱えていたものの、新年度への変わり目も重なってそれが解消されていったことが分かった。生徒 A は、なかなか変化がみられなかった。

(5) 実践の成果と課題

構成的グループ・エンカウンターと学年・学校行事を組み合わせることにより、「参加意欲の向上」や「協力しようとする気持ちの高まり」につなげることができた。また、一つ一つの行事を終えていくことで、集団での達成感や生徒一人一人の存在感を味わわせることができた。一方、これらの行事をより効果的に行うには、行事の時期やその運営について見直す必要が出てきたため、平成 15 年度は、研究担当が該当学年に構成的グループ・エンハウターの内容まで決めて依頼していたものを、平成 16 年度には、目標だけを定め、内容は担任に任せることにした。学級担任からは、「構成的グループ・エンカウンターを行う余裕はない」という声が少なくなかったため、学級での取組に温度差が発生した。生徒の観察から、行事においてもその影響が出ていたように感じられた。

平成 17 年度は、学校行事に重点を絞り、実施時期や組織、その運営方法や内容等について見直しを図る必要が出てきた。

3 平成 17 年度の研究

(1) 研究の仮説

組織マネジメントの手法を活用し、教育目標を具体化し、PDCAサイクル機能を強化すれば、より効果的な教育活動が実践でき、学校行事に意欲的に取り組むことができる望ましい学級集団が育つであろう。

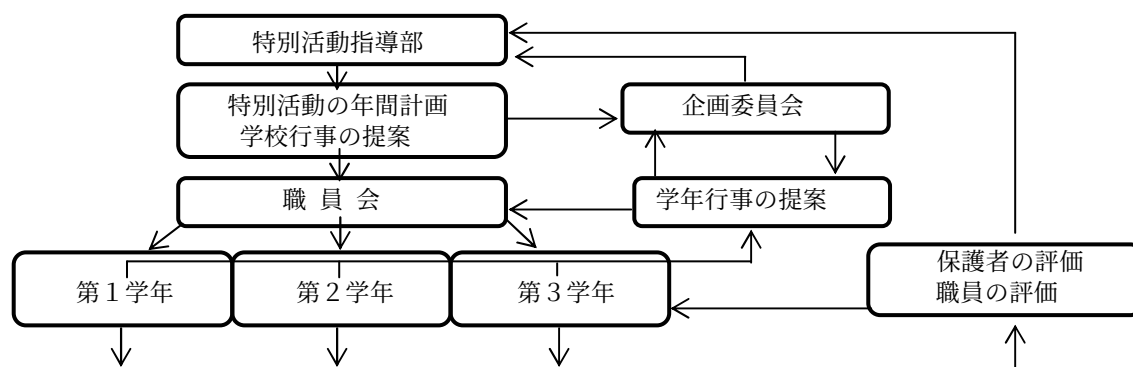
(2) 仮説検証のための手だて

仮説を検証する手だてとして、ア 組織の見直し、イ 組織マネジメントの手法を取り入れたPDCAサイクル、ウ 学級満足度調査（市販Q-Uテスト）と学校行事後の生徒自己評価を活用した。

今年度は、昨年度の反省点を基に、構成的グループ・エンカウンターにこだわらずに、学級活動を行うこととした。そして、昨年度までに行ってきたPDCAサイクルを、より効果的に機能させるために、組織を見直すことと組織マネジメントの手法を取り入れることにした。

ア 組織の見直し

特別活動の提案の流れを明確にし、各学年に研究担当の職員を置いた。



イ 組織マネジメントの手法を取り入れたPDCAサイクル

昨年度までと大きな流れは変わらないが、PLANの段階で組織マネジメントの手法を取り入れた。

学年・学校行事における各学年ごとのねらい・育てたい力を明確化する。(PLAN)

- ・組織マネジメントの手法（SWOT分析）を取り入れ、行事の方向性の検討
- ・学年・学級の実態の把握→学級満足度調査（Q-Uテスト）
- ・過去の自己評価の確認
- ・担任による普段の生活面の記録による実態把握

育てたい力を身に付けさせるための学級活動における手だてを考え、実施する。(PLAN)

- ・リーダー指導，話し合い活動など

学年・学校行事への取組 (DO)

- ・話し合いや製作・準備活動，学年・学級内の練習
- ・当日の活動（演技・発表・競技など）

学年・学校行事後，生徒に自己評価 ⑤職員の評価と保護者の評価 (CHECK)

- ・ねらい達成・育てたい力に重点をおいた生徒の自己評価や反省
- ・学級活動や行事の問題点の把握・検討

④⑤の評価を受け，次の行事を視野に学級活動を実施する。(ACTION)

- ・各学年で④⑤を基に検討・実施

(3) 研究の計画(PLAN)

ア 本校に関するSWOT分析を実施

学校行事を見直すためには、学校の内外の環境や学校の長所・短所を知り、そこから課題解決に向けての方向性を考えなくてはならない。SWOT（Strength：強み、Weakness：弱み、Opportunity：機会、Threat：脅威）分析が有効と考えて校内で行った。

SWOT分析とは経営環境を内部(学校の保有する人材や経営資源)と外部(地域・保護者等の外部環境)に分け、それぞれを学校にとってのプラス要因とマイナス要因に区分して4象限の図を作成・分析することで、以後の経営に生かそうとするマネジメント手法の一つである。

内 部 環 境	外 部 環 境
強み（プラス） ・生徒は誰にでもあいさつができる。 ・生徒の行事に対する取組は熱心である。 ・生徒は部活動にとっても意欲的である。 ・ベテラン職員と若い職員の人数的なバランスがよい。	支援的（プラス） ・教育に関心の高い家庭が多い。 ・行事（土日）の見学者が多い。 ・地域は学校に協力的である。 ・地域に大きなグラウンドがある。 ・地域に大きなホールがある。
弱み（マイナス） ・生徒の転出入が多い。 ・生徒は他の学年と交流がない。 ・職員の話合いの機会が少ない。 ・様々な計画が不十分である。 ・様々な行事に準備時間が不足している。 ・職員間に担当者に任せっきりの風潮がある。 ・職員の仕事が一部に集中しがちである。	阻害的（マイナス） ・学校に対して個人的な意見をもった人が多い。 ・様々な問題を抱えた家庭が多い。 ・事件の多い地区である。 ・学校公開日（平日）の参加保護者が少ない。

イ SWOT分析を基に、クロス分析し、切り口となる行事を決定

SWOT分析のポイントは、＜学校の強みを生かすチャンスはあるか＞＜学校の強みを一層強化することで、阻害要因を克服できるか＞＜学校の弱みで支援を逃さないためにはどうするか＞＜学校の阻害要因と弱みが重なることで危機的状況を招かないためにはどうするか＞という視点で課題解決に取り組み、経営改善につなげることである。

		内部環境	
		強み	弱み
外部環境	支援的	＜強みと支援を利用し相乗効果を図る＞ ・地域の施設を利用し、地域へ積極的にアピールする行事の運営 →合唱コンクール	＜弱みを克服しつつ支援を生かす＞ ・計画に時間をかけながら、保護者や地域に協力を依頼する行事の運営 →学校祭の文化祭
	阻害的	＜強みを生かし阻害要因に対抗する＞ ・生徒一人一人に配慮しながら、活躍の場を多く確保した行事の運営 →学校祭の体育祭	＜守りに徹し、廃止を検討する＞

ウ 学校行事における重点課題と具体的な方策

SWOT分析により、各行事における重点課題と具体的な方策を、特別活動指導部で検討した。

		重点課題	具体的な方策
学 校 祭	文 化 祭	・地域保護者に依頼の活動	バザーやパン販売の依頼
		・生徒が能力・個性を発揮する場の設定	学年発表、ステージパフォーマンス
		・職員が話し合う場・時間の設定	各学年で、育てたい力を明確化 →その手だてを考え、合意し、進行
	体 育 祭	・生徒が取り組みやすい競技や縦割り競技の見直し	ブロック競技数を増やす ブロックによる応援パフォーマンス
		・地域保護者が興味をもつ競技	応援パフォーマンスの工夫
合 唱 コ ン ク ル		・地域の施設を利用 ・地域の人材を利用	勤労文化会館ホールを使用 地域の音楽家に審査員を依頼

(4) 研究の実践

ア 各学年の実践

(7) 実態把握（学級満足度調査と行事後の生徒自己評価）

【図 1】

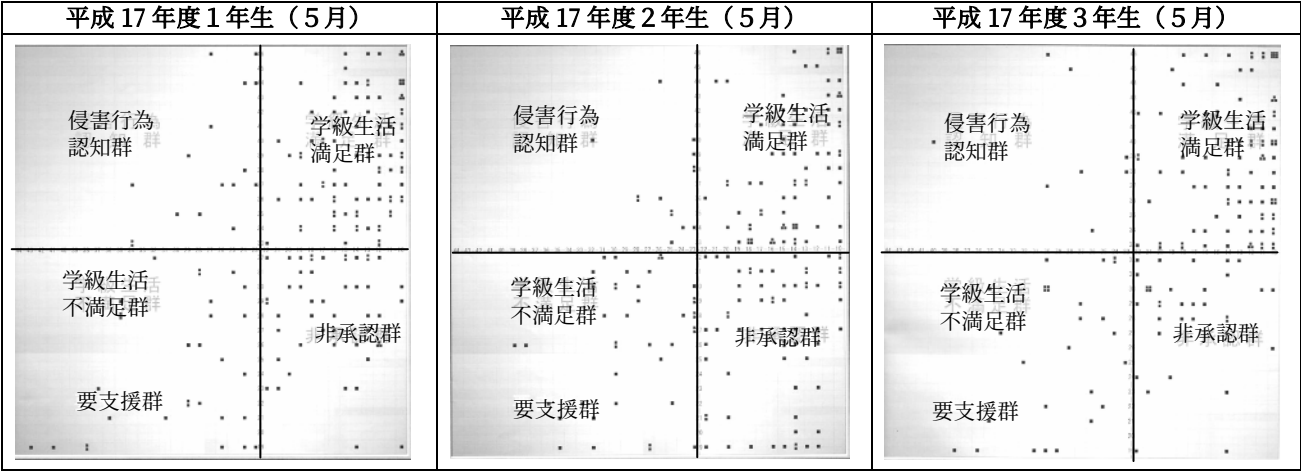
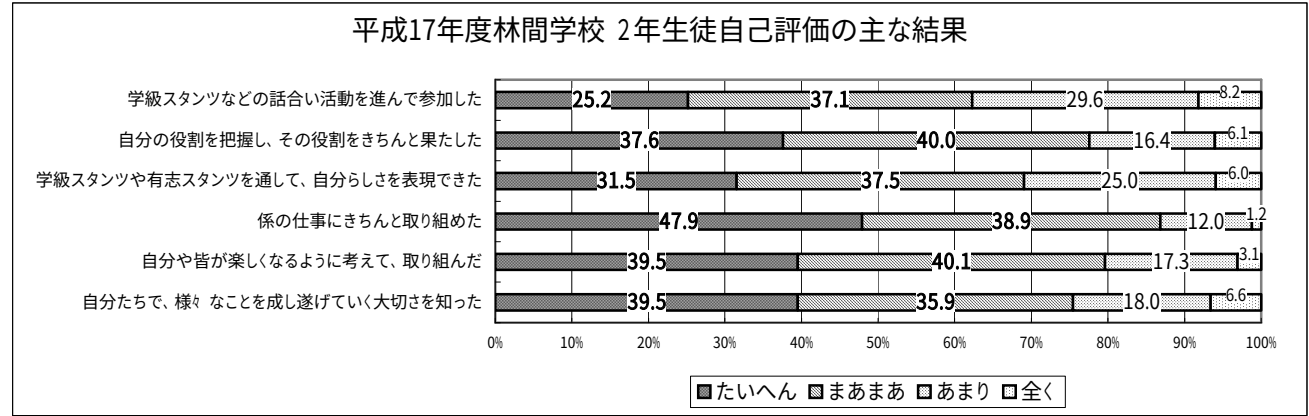
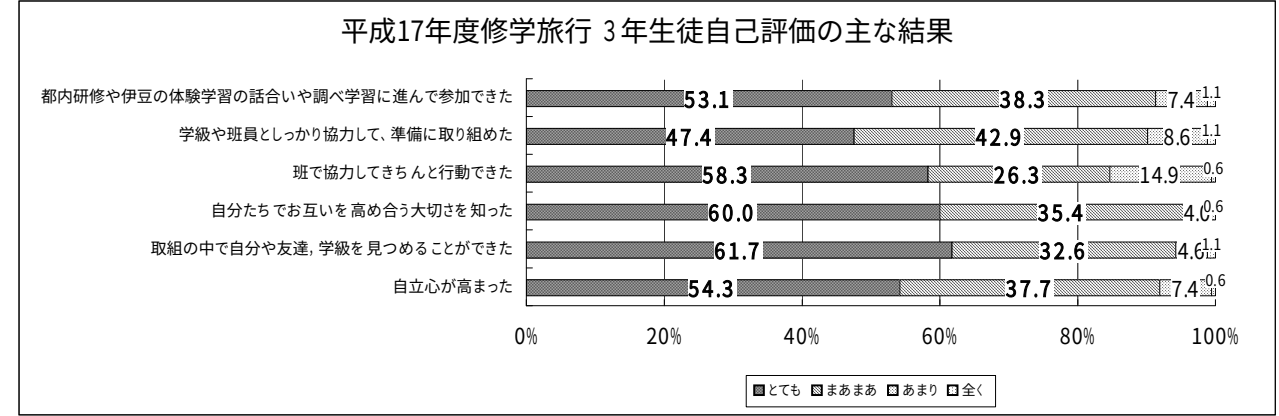


図 1 は、各学年の学級満足度調査の結果である。1・3 年生は、学級生活満足群の生徒がとても多い。それに対し、2 年生は、非承認群の生徒が目立つ。ただ、侵害行為認知群の生徒は少ない。いじめなどは少なく自主的に活動している生徒が多いが、認められることが少なくやる気を失っているようである。

【グラフ 6】



【グラフ 7】



グラフ 6 は 2 年生の林間学校（7 月）の、グラフ 7 は 3 年生の修学旅行（5 月）の生徒自己評価の主なものである。2 年生は項目「話し合い」「自己表現」が、3 年生は「班で協力」が低い値であった。

(イ) 学校祭に向けての計画 (PLAN)

学校行事を通して育成する生徒像

- ・目標をもつ生徒 ・責任感のある生徒
- ・自主的に考え行動できる生徒
- ・積極的な参加意欲のある生徒
- ・計画性のある生徒
- ・自他を（考えや思いなども）認め合う生徒
- ・自己の得意分野で能力を発揮し、一生懸命取り組もうとする生徒
- ・「やればできる」と気付かせ、「できるかもしれない」と前向きに考えることのできる生徒
- ・集団をまとめ牽引できるリーダー
- ・仲間との協力で成し遂げることの喜びや成就感
- ・協力できる生徒
- ・友達の大切さに気付く
- ・自分の力を皆のために役立てることを喜びとを感じる生徒

学校行事への取組の問題点

- ・話し合い活動の時間
- ・十分な時間が確保できていないのではないか
- ・「場」の設定だけでなく、事前の指導を十分に行う必要性
- ・教師の分担を広く、明確に
- ・行事の全体像の教師全員が認識し、共有化へ
- ・計画の甘さ
- ・達成感や成就感をもたせるために陰で支える教師の力量
- ・教師の取り組む姿勢の甘さ

校内全体で、「学校行事」からイメージすることを思い付くままに、短冊状のカードに書き、それをB紙の上で、ブレインストーミング風にグループ化してみた。その中から「生徒像」と「問題点」にグループ化したものを上に示した。これを各学年に戻し、生徒の実態を踏まえて考えながら、各学年の学校行事、学校祭での育てたい力や資質を決め、いつ、どこで、どのような方法で指導していくのかを検討した。

	生徒の実態	つけたい力・育てたい心	場面
1年生	・落ち着いた学校生活ができる。 ・学力が低い。	・集団による達成感・自信・誇り ・リーダーとしての力	・ビッグアートの製作
2年生	・自分のことを考えるだけで精一杯、周囲に気を配って行動できる生徒が少ない。	・自分の力を人のために役立てようとする心	・ビッグアートの製作
3年生	・どんなことも一生懸命できる。 ・時間やルールにけじめがない。	・集団で話合って合意できる力 ・自分たちでルールを決めながら守ることのできる力	・ビッグアートの製作 ・応援パフォーマンス

(ウ) 学校祭への取組(DO)

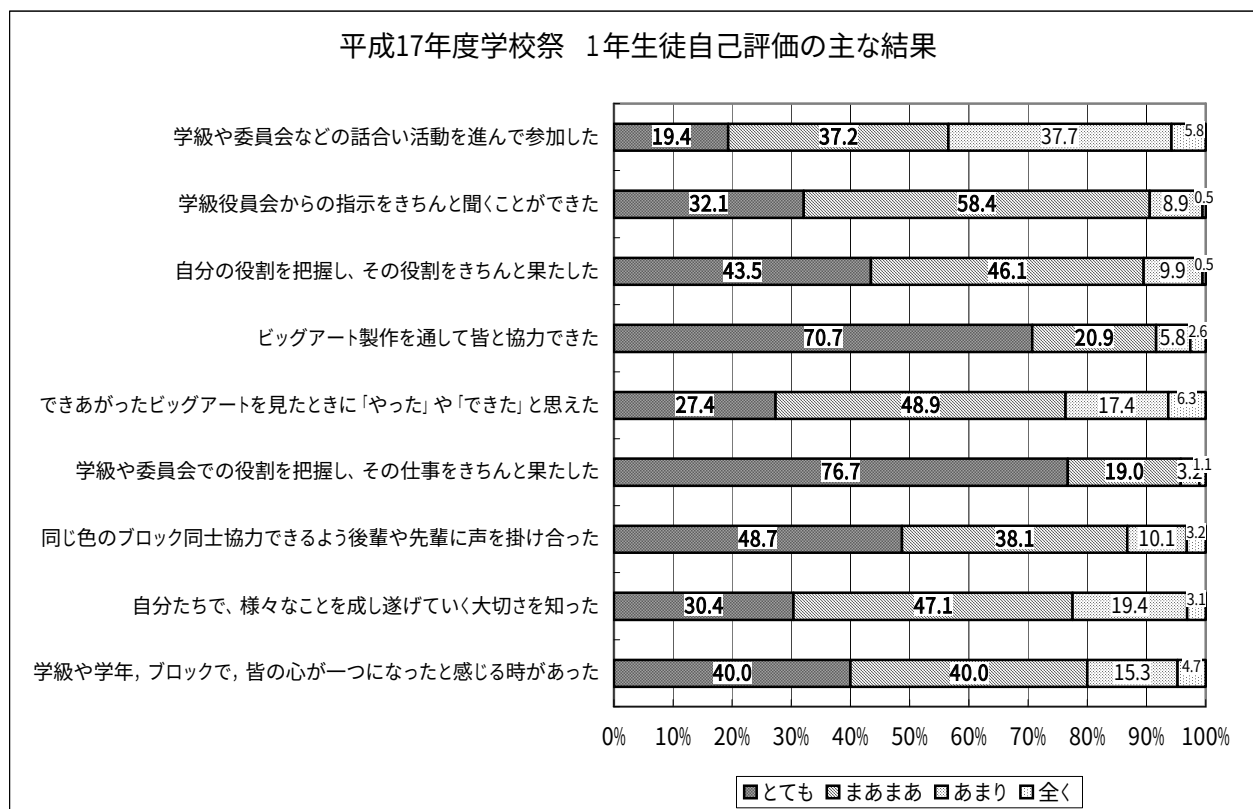
各学年で、学校祭に向けて、生徒にどのように取り組ませていくか計画を立て、実施した。各学級でずれがないように、朝の打合せや学年会で、計画表を基に、リーダーの指示、教師の指導などを、その都度、確認しながら、学級活動を行った。

「ビッグアート」指導の流れ（1年生）

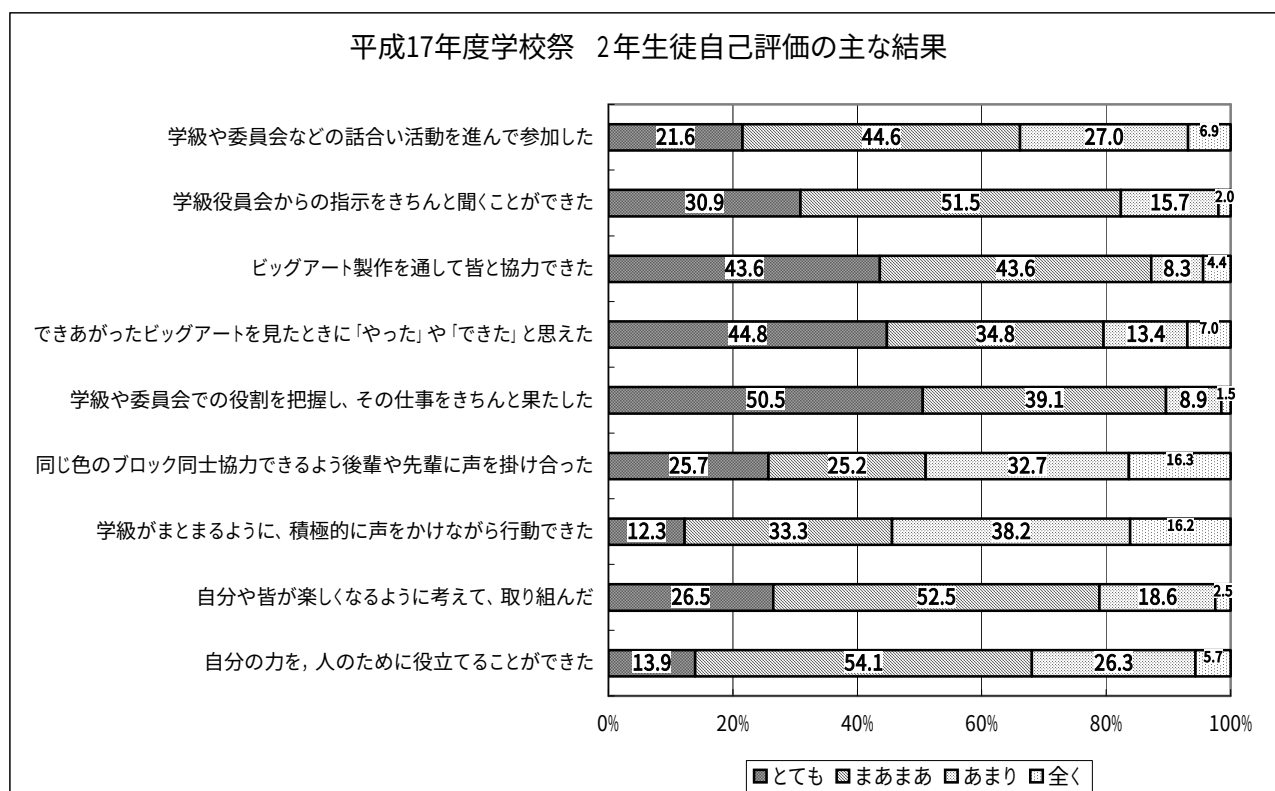
学級役員会	学級役員会ビッグアートの概要説明（趣旨・例示）→「どんな方法にしようか？」→「点画」の方向へ→議論→学級役員会の意見として決定→学級へ投げ掛け（ リーダーへ指導 ）
学 級	各学級へ提案→「異議なし」→デザイン画へ全員の取組→集約・掲示→アンケート実施
学級役員会	アンケート集約→候補の決定（ 教師側からも指導 ）
学 級	学級へ承認の確認（ 決定の理由等の指導 ）
美 術 部	色づかい・もと絵再構成
学級役員会	下書き準備・色指定点検・ 全員で取り組むときの指示確認
学 年 全 体	全員作業
学級役員会	貼り合わせ・色点検・掲示用意→発表用具づくり→発表の流れ案づくり→発表各部原稿づくり→原稿の検討→役の動きを含めた発表練習→展示（文化祭前日）→発表（文化祭当日）→片付け→再利用→ 他の生徒の評価とともに掲示 → 相互評価のありがとうカード（いいところみつけ）で認め合い

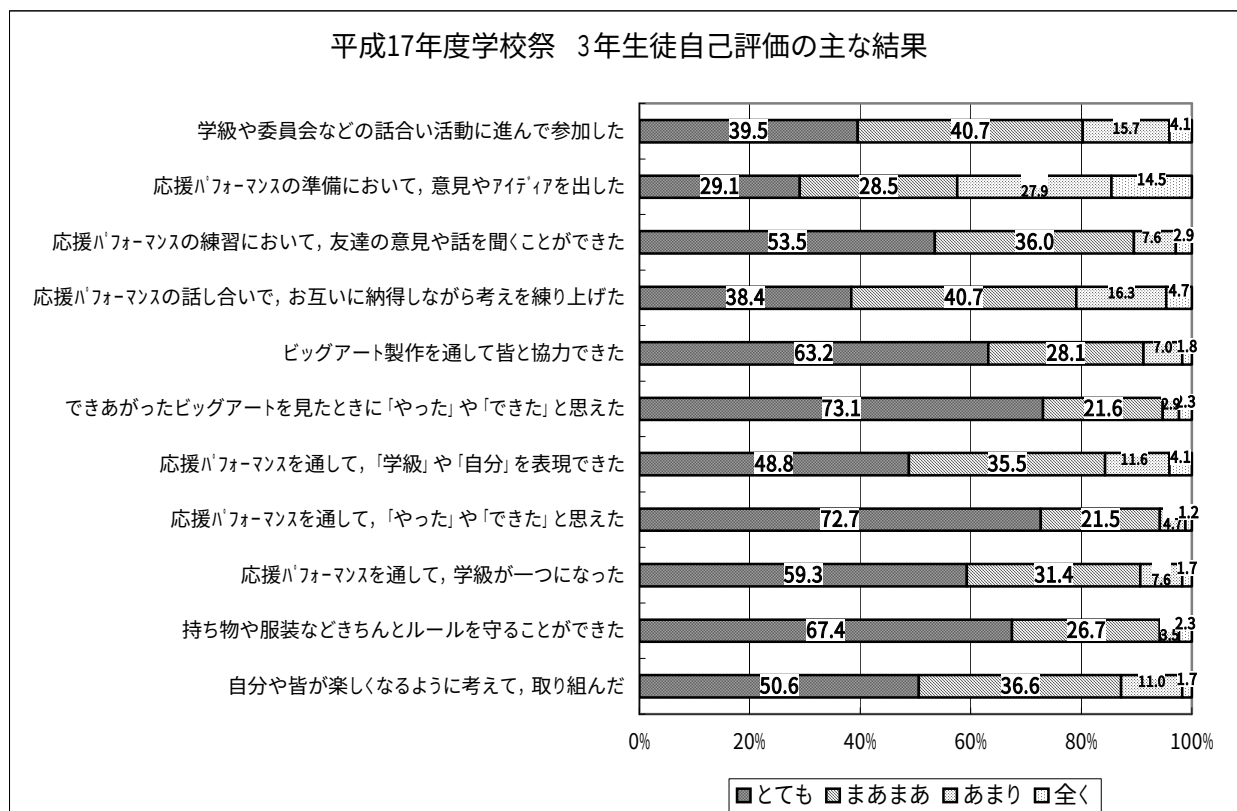
(Ⅰ) 学校祭後の生徒自己評価 (CHECK)

【グラフ 8】



【グラフ 9】





1年生に付けたい力・育てたい心は、「集団による達成感・自信・誇り」「リーダーとしての力」であった。項目「ビッグアートで協力」「ビッグアートの完成充実度」は、「できた」がそれぞれ87.2%、79.6%で、高い値になっている。また、「学級役員会からの指示理解」「役割の把握」についても高い値を示しており、リーダーからの指示がきちんと伝わっていることがうかがえる。ただ、「話し合いの積極性」では43.5%の生徒が「できなかった」と答えている。活動場面に、リーダーから指示されることが多く、話し合って決めていくことに欠けていたことが考えられる。（グラフ8参照）

2年生に付けたい力・育てたい心は「自分の力を人のために役立てようとする心」であった。項目「人のために…」は、「できた」が68.0%であるが、「ブロックでの声掛け」では49.0%、「学級がまとまるように…」では54.4%が「できなかった」と答えている。生徒一人一人が、具体的にどんな行動をしていけばよいかという教師の指導に欠けていたことが分かる。（グラフ9参照）

3年生に付けたい力・育てたい心は、「集団で話し合って合意できる力」「自分たちでルールを決めながら守ることのできる力」であった。「意見やアイデアを出した」は少し値が低いものの、「話し合いの積極性」は80.2%、「納得して考えの練り上げ」は79.1%と「できた」という値が高くなっている。昨年度まで応援パフォーマンスは服装等の規定がなかったが、今年度から生徒たちで話し合っただけで決めていくこととした。学級活動で話し合う場面が増えていき、自分たちでつくり上げた意識が高いようであり、「ルールを守る」も94.1%と「できた」という値が高くなったと考えられる。

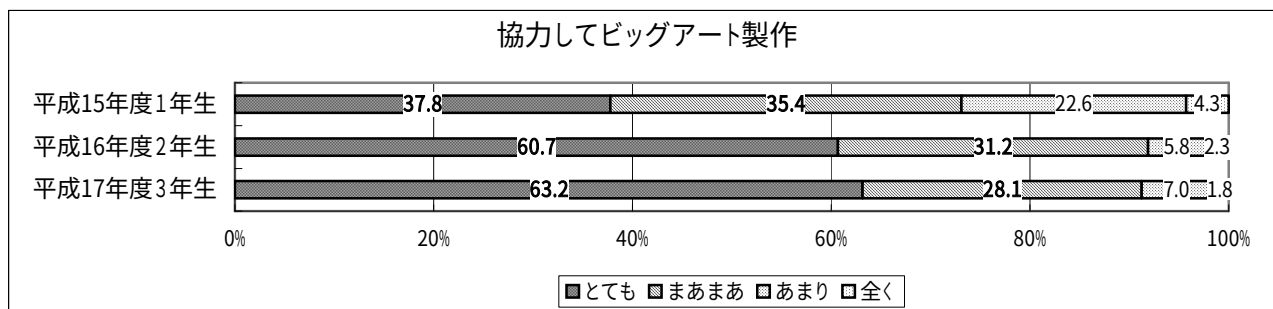
(オ) 次の行事に向けての方向付け (ACTION)

学校祭の生徒自己評価は集計できたが、現在、各学年で学級満足度調査を実施中であるため、その結果と併せて、合唱コンクールの各学年での方向付けを検討していく。

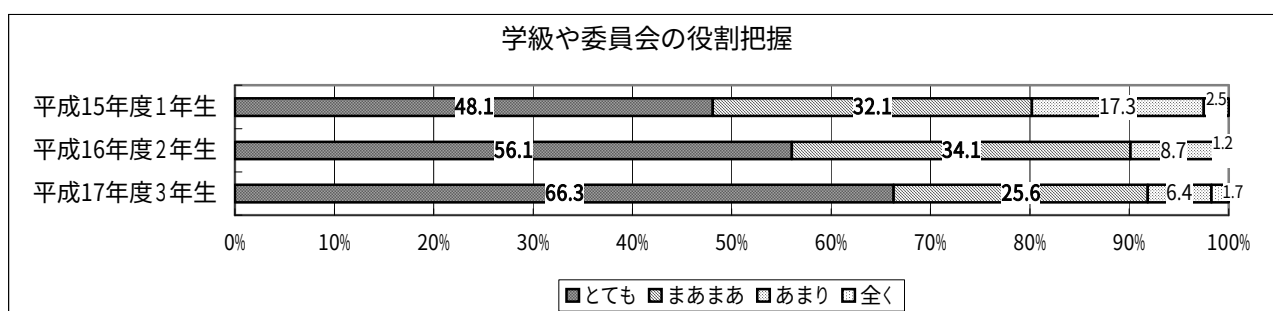
イ 生徒の変容からの考察

平成 15 年度の入学生（現在の 3 年生）の学校祭後の生徒自己評価を 3 年間分の比較をしてみたのが以下のグラフである。現在の 3 年生は、学年が上がるにつれて、全般的に自己評価が高くなっている。

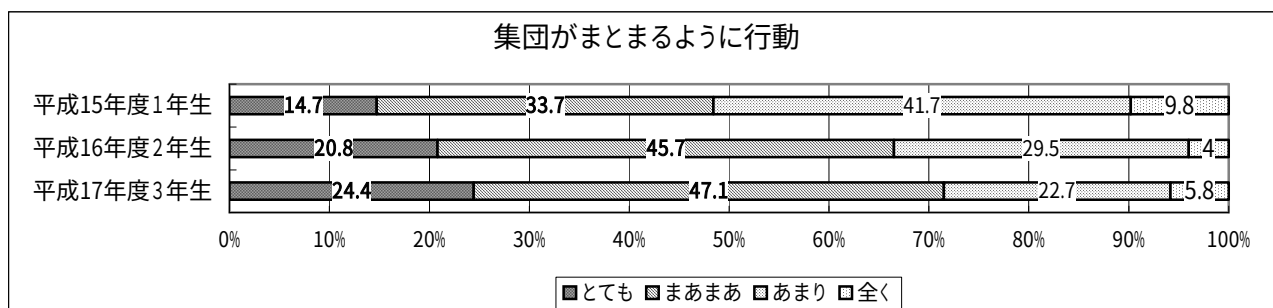
【グラフ 11】



【グラフ 12】



【グラフ 13】



4 3 年間の実践の成果と課題

平成 15, 16 年度の実践として、構成的グループ・エンカウンターと学年・学校行事を組み合わせることにより、「参加意欲の向上」や「協力しようとする気持ちの高まり」につなげることができた。

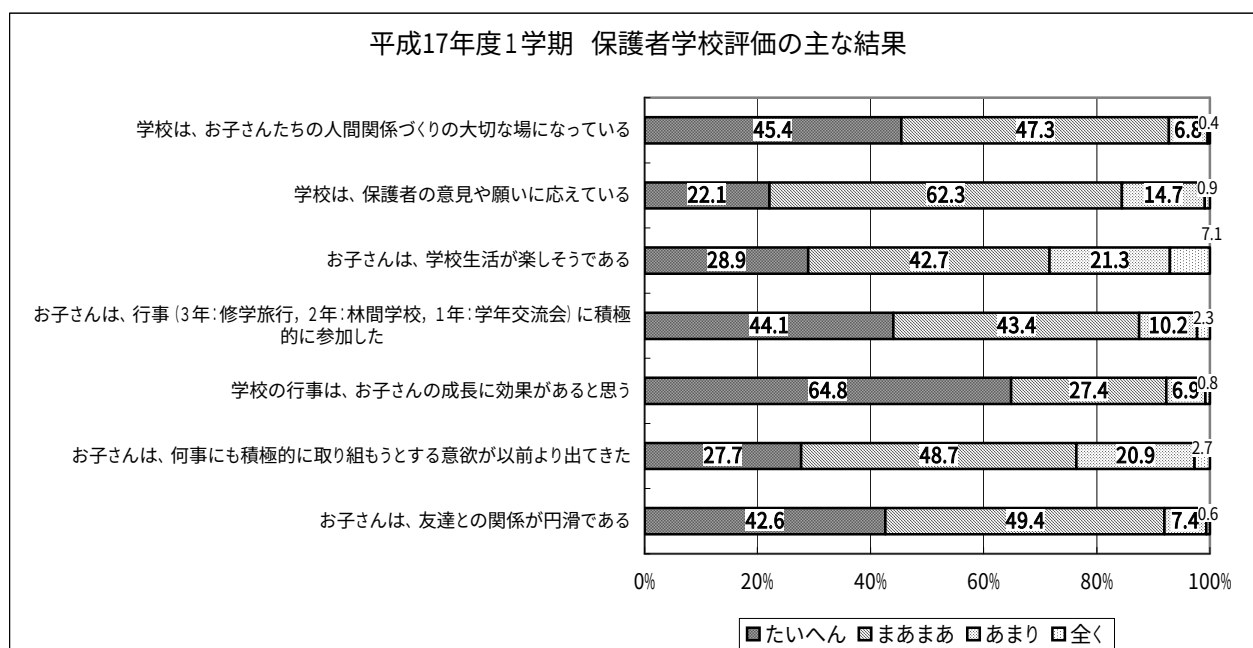
【グラフ 13】からも分かるように、学校祭後の生徒自己評価の項目「集団がまとまるように行動」では、48.4%→66.5%→71.5%と年々「できた」という値が高くなっていった。

また、一つ一つの行事を終えていくことで、集団での達成感や生徒一人一人の存在感を味わわせることができた。一方、これらの行事をより効果的に行うには、学級活動・学校行事の内容のような生徒側からの働き掛けだけでなく、組織マネジメントの手法を取り入れ、教師側からも働き掛けを行うことが重要であると分かった。昨年度までの学校祭の職員記述評価は、感想のようなものばかりであったが、今年度は次ページに示すように、職員の動きにかかわる内容のものが多く挙げられていた。職員の意識にも少しずつ変化が出てきた。

- ・優先期間、準備など係がダブることがあるので、もう少しすっきりした形で生徒職員が動けるとよいと思います。
- ・もう少し委員会の指導徹底を。
- ・もっと早くにルール確定、教師間の徹底、生徒の指導をしていきたい。
- ・自分の委員会だけやればよいという風潮があるような気がする。
- ・失格だらけの責任はすべて教師の指導不足として考えたい。来年は同じ過ちがないようにしっかり準備したい。
- ・級長や副級長の指導は事前にしておくべき。全体練習はあくまでも全体の練習だと思う。
- ・体育科にやってもらっている体育祭の練習。学年の教師も生徒の動きが分かるようになるためには、実際の練習の場に立ち会わなければならないと思う。学年なり、種目別の練習時間を増やしてほしい。
- ・ステージパフォーマンスの練習はもっと教師の指導を強化すべき。もっとレベルを上げたい。
- ・生徒の控え席に教師がいないことが多かった。教師サイドからももっと盛り上げていこうという気持ちが必要。

保護者に対する学校評価（グラフ 14）にみられるように、学校行事が生徒の成長に効果があると考えられる保護者がほとんどである。学校行事が人間関係づくりの大切な場であると考え、その充実を図っていく必要がある。

【グラフ 14】



5 おわりに

生徒の達成感や満足感を自己評価させることによって、集団全体の傾向や個々の生徒の様子がつかめ、それにより、学級活動や行事における手だてを考えるというPDCAサイクルの重要性が認識できた。また、その機能をより効果的に機能させるために、組織的に課題と解決策を考えることが重要であると分かった。不登校の生徒を少しでも減らすことを目標に始めた研究であるが、【グラフ 15】にみられるように、わずかながらではあるが、本校の不登校率は年々減りつつある。今後も、学級や学校が、生徒たちにとって居場所となるように更に研究をしていかなければならないと考えている。

【グラフ 15】

